國學院大學学術情報リポジトリ

神道研究の国際的ネットワーク形成：神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): 170.4, 神道‖シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 魯, 成煥, 色, 音, テーウェン, マーク, ブリーン, ジョン, ベンテリー, ジョン, ナカイ, ケイト, ヘイヴンズ, ノルマン, 遠藤, 潤, 平藤, 喜久子, 武井, 順介, シッケタンツ, エリック, 加藤, 里美, 加瀬, 直弥, 松本, 久史, 真田, 治子, 稲場, 圭信, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000506

日本側の計画に基づく討議２

加藤里美
（事業推進協力者・国学院大学日本文化研究所講師）
加瀬直弥
（ＣＯＥ事務局・国学院大学研究開発推進センター講師）
松本久史
（ＣＯＥ事務局次長・国学院大学日本文化研究所講師）

【司会（井上）】　それでは、時間になりましたので、２番目のセッションを開始したいと思います。

「日本側の計画に基づく討議２」ということですが、ここでは、ＥＯＳ以外にいろいろ国学院で構築しているようなデータベース、あるいはそれに関連したプロジェクトの紹介を兼ねつつ、また新しい視点からの問題提起をしていただけるかと思っております。

３人の方の発表で、最初に加藤さんですね。よろしくお願いをいたします。

発題

加藤里美

【加藤】　日本文化研究所の加藤と申します。

私自身は、ＥＯＳでは音声で参加させていただいております。本日は、ほかに携わっている研究プロジェクトにおける資料のデジタル化およびデータベース作成についてお話させていただきます。

「国学院大学学術資料データベース」（http://frontier-db.kokugakuin.ac.jp/）と称するものですが、これは、文部科学省――当時は文部省ですけれども――の私立大学学術高度化推進事業の一環として平成11年、1999年から８年間にわたって学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクトとして日本文化研究所と大学院が受け入れ機関となって続けてきたプロジェクトの成果の１つです。

研究テーマとしては、「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」という内容で、

文字通り、劣化の進んだ画像資料を保存し活用するための資料化についての基礎的な研究を進めてきたわけです。ここでいう劣化画像とは具体的にどのようなものかと申しますと120年以上の歴史を有する本学には、その間に多くの先生方が研究に関連する資料として保管されてきたものや、個人で収集された学術資料などが各研究室に多量に保存されてきており、これらがその的となりました。まさに眠れる宝というか、研究室の人間でなければ見られない、あるいは研究室の人間でもこの汚い箱は何だろうと開けてみると貴重な資料が出てくる、というようなことが各所で引き起こっていたわけです。こうした資料のうち書籍に関しては図書館、考古遺物については考古学資料館といったように整理し管理されており、利用可能なものが多い。しかし、それ以外の資料――つまり写真や調査時の手帳など画像資料を中心とした資料類は簡単な整理がなされるかもしくは何もされないまま放置されてきているのが現状です。つまり、二次資料として扱われてきた画像資料類が中に浮いた状況になっているわけです。しかし、これらの資料は書籍や考古遺物同様に多くの学者を輩出した、いわば本学の学問分野を見直す、あるいは外へさらに発信していけるだけの学史的価値が付随していることや、画像資料が重要文化財として指定されるなどその価値が認められつつあります。そこで、本学所蔵の画像資料について劣化の著しく古いガラス乾板の保存と整理を行い、それらの資料化と活用に向けてデジタルデータ化を進め、研究における活用を目標に活動を続けていきました。ガラス乾板といってもご存知の方がどのくらいいらっしゃるか分かりませんけれども、大学の建替えに伴う引っ越し等も絡んで、こうした資料がしまいこまれた、いわゆるパンドラの箱がさらに増加しました。

図13　国学院大学学術資料データベースのホームページ

さて、こうして作成された「学術資料データベース」は、およそ、今見ていただいてい

るところが入り口で、資料の性格からして先生方のコレクションごとに並んでおります(図13)。ここから、例えば、神道考古学の提唱者である大場磐雄先生が調査や訪問した際に撮影された各地の写真、昭和の初期から戦前ぐらいまでの写真がキーワード検索できるようになっております。中には、例えば登呂遺跡のように戦争で焼失してしまった写真も含まれており、非常に貴重なものが含まれております。さらに、大場先生自身が写真の説明として付されているメモ等も全てテキスト化して、同時に見られるような状態になっている。つまり、大場先生の資料をより正確に記録、保存しできるかぎり原資料に近い形で公開することに重点をおいてきたのです。このことは大場先生自身の学問の形成過程や特徴を如実に示すと同時に神道考古学の学史としても重要であると考えたからです。また、これらの資料を書籍などと同様に学術資料として活用するためには、これらの作業を省くわけにはいかず、他の資料についても同様に行ってきました。

平成 11 年に指定を受け、２年後には試験運用としてホームページを開設し、その中で簡易検索が出来るようにいたしました。そうしたところ各所・各地から非常に反応があり、資料閲覧や資料提供の希望、あるいは小学校の IT 授業での利用などに関する問い合わせがありました。活用については、運用している現在でも学術的な問い合わせが続いており、一定の評価を得ているといえます。それで、むしろこのプロジェクトの過程で出てきた問題や今後の課題となる点について申し上げます。

１つ目の問題として、平成 13 年に公開した簡易検索のシステムが非常に好評であったので、気をよくして、より充実したものを提供しようと、実は、データベースに手を加えたわけです。ところが手を加えたところ、システムが複雑になり過ぎてしまって、システム自体が簡単な検索でエンジンにひっかからなくなってしまった。手を加える前には、例えば小学生の夏休みの課題に使いたいとか、あるいは、小学校の授業で、歴史の中で登呂遺跡を取り上げたいとか、いわゆる研究者以外の方からの問い合わせがあったわけですが、それがなくなった。研究を目的とした方からの以来は従来通りあり、本来の目標である研究に供するという意味では十分に達しているが、それ以外のユーザー、つまり汎用性という意味では後退した。一般向けのコンテンツ作成を検討する必要がある。今後、デジタルミュージアムの一つとして運用する際に学術資料の利用者を研究者以外にまで広げるのか否か。これが１つ目の問題点です。

それから、２つ目の問題点としては、いろいろな先生方のコレクションがありますので扱う資料が幅広い。考古学だけでなく、ほかにも民俗、神道などの資料が公開されていることから、公開した際に当然それについての問い合わせもある。その際の対応システムを構築しておく必要があるということ。これは、今後改善されていかなければいけない点の１つだと思います。

これは１つ目の問題とも関わることで、この後の加瀬さん、松本さんからのお話とも関係しますが、「学術資料データベース」で式内社の神社の写真があった場合に、例えば「神社データベース」とリンクしていたら資料としてより充実するのではないか。今後は、まず学内の資料で、できるだけ重層的で豊富な資料を見やすくできるようなシステムの構築

が必要であること、あわせて外からの問い合わせに対しても学内共通の対応システムが必要ではないかと考えております。

簡単ですけれども、これで終わります。

【司会（井上）】　ありがとうございました。

午前中と同様に進めますので、もし今の説明、簡単なことで確認しておきたいこととかがございましたら。おわかりになりましたか。

【加藤】　ちょっと早口ですみません。

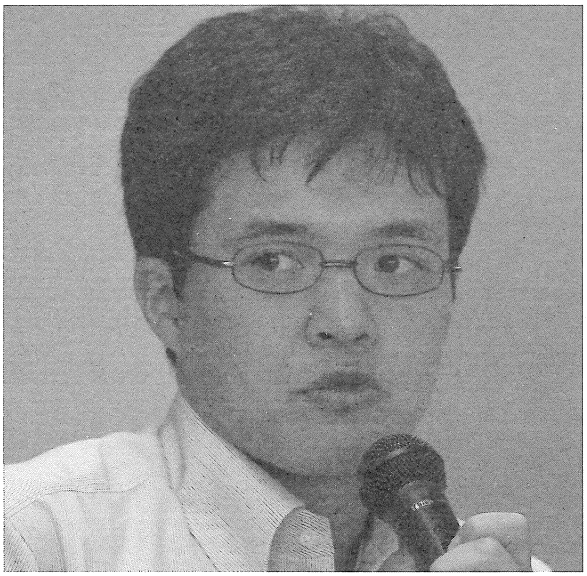
【司会（井上）】　そうしましたら、本格的な質問は後でということにしまして、次は、加瀬さんですか。

発題

加瀬直弥

【加瀬】　国学院大学の加瀬です。本日は、よろしくお願いいたします。

ここでは、私がＣＯＥで携わってきたところの「神道・神社史料集成」の現状・課題についてお話ししていきたいと思います。これは、全国神社に関する史料を採録対象にしたデータベースで、平成14年のＣＯＥ採択を期に始まったものであります。



まず、「なぜ神社か？」ということから説明する必要があると思います。神道を考える上では極めて多くの切り口がある訳です。ただ、その神道が展開された場となると、ある程度焦点が絞られます。その場が神社なのです。しかも、神社というところの特徴はそこばかりではありません。神道に限らず様々な信仰が複合的に組み合わさって神社で展開されているのです。つまり、神社の把握は神道の実態をより具体的に分かりやすくするのでは、という点が神社を対象としたその主たる理由になります。

ただ、一口に神社研究といっても、アプローチの仕方によってさまざまな見解が成り立ちうるわけです。ただ、その基本となる、共通する史料というものが存在しており、それをもとにしなければ実証的な研究できません。つまり、基本となる史料というものをまずは共有して、その上で考えていかなければ研究の議論はできないことになります。そういう発想のもとで、研究の基盤となる史料収集のデータベースを作る事業を進めてきたわけです。

お手元にカラーのペーパーがあるかと思うので、それをご参考いただきたいと思うんで

すけれども、最初にまずつくり始めたのが、「神社史料集成」というものです。ちなみに、ペーパーは、実際にはＣＯＥの始まるときに作った４年近く前の構想でありまして、「□」がついているのが、現状でできているものです（図 14）。

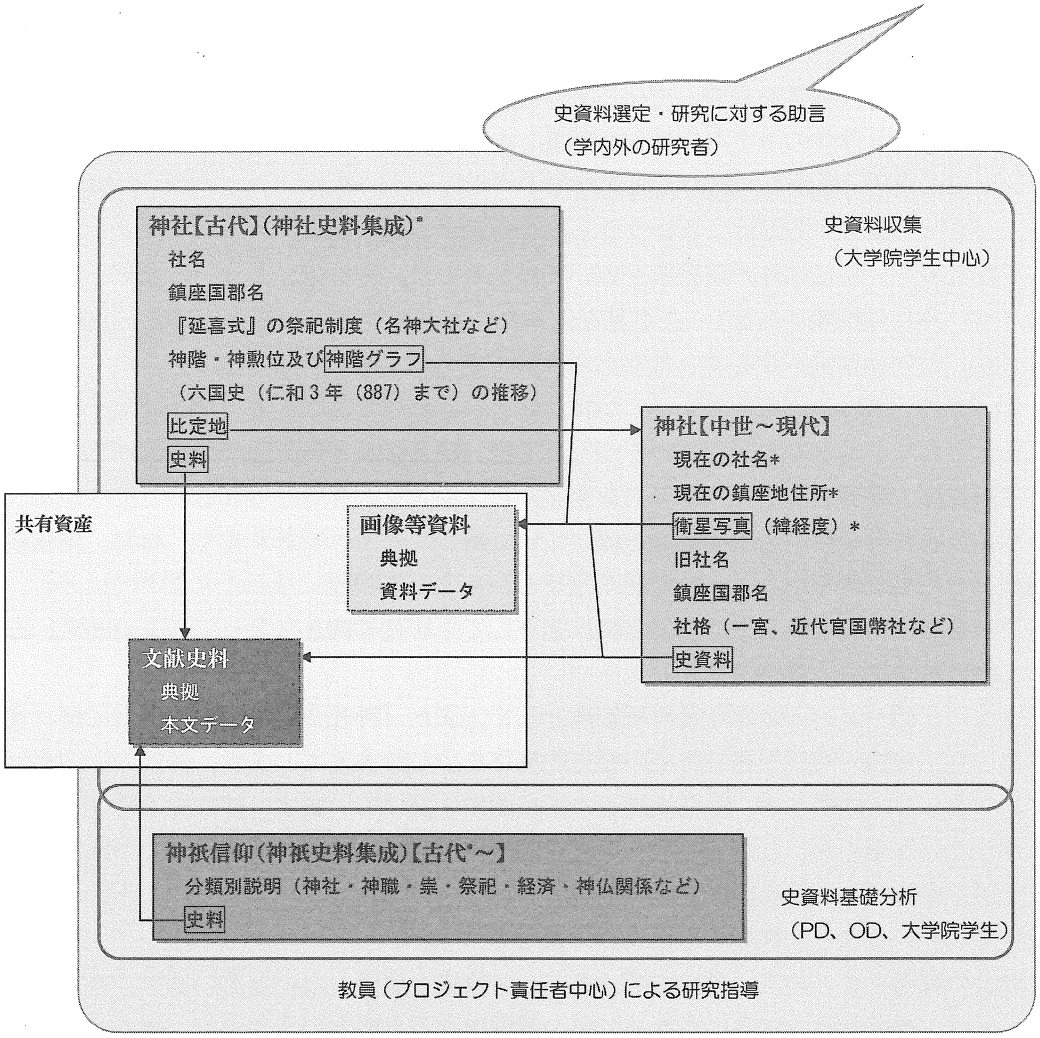


図 14　神道・神社関係データベース『神道・神社史料集成』の構造と組織（＊は現在運用中）

１つ１つ説明していきますと、今言った趣旨のもとでできている「神社史料集成」というものは、古代の限られた時代、六国史をはじめとした古代の実態を示す史料を中心に、神社ごとに集めたという、そういったものです。なお、対象となる神社は今 500 社ほどありまして、それらに関しては、六国史に関する史料に関してはすべて収録をし終わっています。これによって、研究のたたき台になるようなものをつくれないかと、そういったところでこういったものをつくってきたわけであります。

ただ、神社だけでは当時の神祇信仰全体を見ることができない。研究というものをもっ

と重要視しなければならないということがはっきりしました。そういったことで、神社とは別に、より広い視野からの研究ができるように、下のそのオレンジ色で書かれている「神祇史料集成」というものをつくってみました。これは、「神職」「祟」などのカテゴリーを設け、神社と同様史料を分類し、時代ごとに並べています。それとは別にこの「神祇史料集成」に、「概説」というのを設けておりまして、分類ごとに、その基本となる史料というものをもとにして言えること、すなわち基本的な説明となるようなものを、大学院教育の一環として、古代神道を研究している大学院の学生たちに書いてもらいました。

データベース作成の上でもうひとつ重視したことがあります。作っていく過程で、コンテンツ等の構想・採録を内部の人間だけですべて行っていると、「たこつぼ」に陥ってしまう、つくって満足するだけ、ということになりますので、実は、アドバイザリーボードのようなものを、特に学外の研究者を招いて作りました。そこで、こういったデータベースにどういった可能性があるか、ご意見を伺ったことがあります。「もっと多くの史料を集めるべき」という意見が中心で、なんとか反映できればと思っております。

データベースはこれだけですべてが終わりというわけではなくて、神社のデータベースをもとにしてどんどん展開していくつもりです。拠点における研究の幅を広げるということであれば、展開したデータベースを土台にしてシステムを広げられるのではないか、というふうに私自身は午前中の議論を聞いていて感じたところであります。なお、先程来、議論として出てきている「どの階層に見せるか」という問題になってきますけれども、このデータベースは今申し上げたように、どうしても研究者向きになってしまいます。この点、付け加えたいと思います。

さらに、データベースの今後の可能性として、また「神社史料集成」のほうに戻りますけれども、神社の時代を通じたその歴史的推移を少し踏まえています。神社の個別的コンテンツとして、住所とか、所在地周辺の衛星画像を設けています。神社史の研究上、古代の神社というものが、なかなかそれから後の歴史的経緯に結びつかないという性格はありますが、それでも一応その中世以降が展開したときの接点として、ここにこういうものを載せようというような構想のもとに作ったものです。

以上の説明をまとめて、今後のデータベース作成を展望したいと思います。まず第１点としては、神道を研究するに当たって何か基準になるものということで、なるべく研究の幅が広がるものをその対象としたデータベースを１種作ることが必要ではないでしょうか。また、研究体制として、いかにその大学院の学生を教育に取り込んでいくかという問題が生じてくるので、それを解決すべきです。あともう１つは、それに対する評価体制というものが必ず必要になるということがあります。そこに外国人の先生方など外部の研究者の方が入れるようにするという方向性は当然求められると思います。最後に、史料は共有化すると。要するに、個々のデータベースというのは、あくまでも大学にいくつもあるデータベースの中の１つに過ぎないのですから、ほかのデータベースとの共有性というのも考えなければならないでしょう。神社のデータベース作成においては、その点は承知して作成しています。そういった点を射程において、今後、進められる機会があったら進めてい

きたいというふうに考えているわけです。

以上、ひとまず報告を終わらせていただきます。

【司会（井上）】　ありがとうございました。

どなたか確認しておきいたいことはございますか。よろしいですか。

それでは、松本さん、最後、お願いします。

発題

松本久史

【松本】　国学院大学日本文化研究所の松本でございます。

おふたりの、既に具体的にインターネット上で運用されているもののご説明、ご紹介があったと思いますが、私のほうからは「「国学者データベース」の作成と将来構想」というペーパーを１枚配布いたしましたので、それに基づいてお話をします。まず最初に、この「国学者データベース」というのは、まだ実際にアップされているものではありません。本当はこの場でお見せできればいいのですが、そういう状態ではないということをちょっとお断りしておきます。

「国学者データベース」の作成経緯でありますが、国学院大学21世紀ＣＯＥプログラムでは、第Ⅲグループを中心としてＥＯＳを進めていますが、神道・神社の歴史的形成・展開の研究を担当する第Ⅱグループとしましては、データベース的なものとしては加瀬さんからお話のあった神社史料データベースとあわせて、もう１つ大きなものとして、ＣＯＥのテーマである「国学的」研究発信の大本たる国学者の基礎資料としてデータベース作りをしようというわけで、現在作業を進めております。

しかし、これはもともとこのＣＯＥがあったからいきなり始めたというものではなくて、日本文化研究所は、国学研究をテーマの柱のひとつにしており、かつて昭和50年代に、『国学大成』編纂プロジェクトという大がかりな刊行プロジェクトが存在しました。結局『国学大成』は刊行できませんでしたが、その産物として、国学者自体の基礎データを収集す

るということを行っておりました。その成果としては、『和学者総覧』（汲古書院　平成２年）が刊行されて、文学・歴史・神道など、近世の日本研究をする方であれば、必ずご使用になられたことはあると思います。こういった形で研究所の国学研究の成果が公表され、特に人物の歴史的研究をするときには欠かせない本になっているわけであります。

ところが、『和学者総覧』に掲載されたいわゆる「和学者」は――これは広い意味では国学者でありますが――11,637 人掲載されていますが、実際研究所で蒐集したカードを見ますと、その約３倍の約３万人分のデータがあります。そのカード――「和学者カード」と呼んでおりますが――をここに持ってきましたけれども、こんな箱に入っていますが、これが約３万枚あります。それを何とか活用したいと考えたのが発端でした。いろいろな国学者のデータが入っているのですが、いわゆる未定稿の形も多いですから、必ずしも体裁が整っているわけではありません。そういう状態で、非常に手間もかかることですので、ある意味「放置」されていたわけですが、やはりそれを新しい形で復活させるということを試みたいということが国学者データベース作成の一番の動機であります。

実際その作業過程においては、ＣＯＥ研究員や大学院生たちが、もうひたすらに入力という、確かに一種砂をかむような地道な作業を行うということもありますが、大事なことは、一個一個、国学者の名前にしても、どんな名前で、それが正しいのだろうか、生没年は正しいか、著作は全部正しいかということをかなりチェックしております。そういう理由で、非常に時間がかかっておりまして、いったい何をやっているんだという声も確かにあるのですけれども、かなりそういった事実確認、つまりコンテンツとしての質を高めるということにかなり時間をとっております。

また、このデータベースは、形態としてはウェブ上の公開ということを目指しているわけですけれども、単にテキストベースだけではなくて、それにかかわる画像データ収集も行っております。現在は、お墓が中心で、全国の墓地を廻って写真を撮影しておりますが、その他肖像なども含め、いろいろな画像を収集しようという計画も立てております。

ペーパーの３のところにほとんど入っているところでありますが、現在、チェックも含め、入力がほぼ完成しているのが全体のわずか 10 分の１の約 3,000 名分です。かなり事実確認という点を、ＣＯＥの大きな目的である若手研究者育成のためにも、大学院生を中心に作業を進め、院生教育としての意味も含め自発的に調査をさせております。その結果、新たにかなり訂正も加わっていますし、『和学者総覧』では簡潔な表現なので、詳細はほとんど載っておりませんので、追加項目などをかなりつけ足しをしているわけでありまして、『和学者総覧』をベースにしながら、新しいコンテンツを作成しているということがいえるでしょう。

４の、構想と可能性、実際にまだこれはアップしていないのでまだ何とも言えないところで、この国学者の検証というのも大体１割、3,000 人分、ほぼできる状態の直前までいっていますので、とりあえずパイロット版をつくる。それで、まずは学内のしかるべきＣＯＥ関係者にチェックをしていただいて、これが出せるものであるかということを検討し、年度内には出しておく必要があるだろうというふうに思っております。

もうちょっとこのデータベース作成の意義的なところを申し上げなければいけないのだろうと思いますが、やはりＥＯＳの場合は神道・神社ということでありますが、国学者データベースのほうは、やはり国学者・国学という、国学院として発信すべきもう一つの大きなテーマというのがあるかと思います。基礎的なデータを集積して、そこを出発点に「国学」とは何だろうかというものを発信していく、そのための大きな基礎作業として、そういった実際に国学をやった人々というものはどういうような人間がいたのかということを、ある意味、網羅・悉皆的に行っていると考えております。ですから、和歌・俳諧を作ったことぐらいしか経歴のわからない人なども非常にたくさんいまして、その検証に手間取ったりしてもしておりますが、やはりそういう中で国学という学問自体の時代・地域にわたる広がりを多くの人たちに知っていただきたいと考えております。

それから、情報ネットワークの問題も含めてなんですが、まだこれは学内の問題でありますが、そろそろこれも学外にやっぱり開いて、特に国学者というのは、近世・近代において日本国内の中でのネットワークを形成していたわけでありますから、「現在的国学」として、地方の人々との研究ネットワーク形成というのも必要かというふうに思います。

海外発信の問題は、まだこれは全然対応ができておりませんで、項目のローマナイズもしておりませんので、多分これを見るのは、海外ではこういった方面に関心のある日本研究者だけだろうと思います。それを今後どういうふうにしていくべきなのかということも、まだまだ検討課題ではあるかと思います。

それから、多少長くなりましたので終わりますが、ひとつだけ補足いたします。午前中、遠藤さんのほうから配られた１枚のペーパーがあると思いますが、日本文化研究所と関連出版物におけるデータベースの可能性ということで、いろいろなものとリンクしていかなければいけないのでしょうし、当然ＥＯＳのほうでも人名、書名という項目があるので、国学者データベースは当然それとリンクすることを考えなければならない。しかし、「ねばならない」という段階でありますので、まだ緒についておりません。

『和学者総覧』もこの遠藤さんのペーパーに入っておりますように、研究所で過去刊行した出版物も、いろいろ活用できるコンテンツというものがたくさんあります。特に神道・神社とか、日本文化、国学というものにかかわった出版物がこのようにいろいろございます。これらはしかるべき作業をすることによって実際コンテンツにできる、そして発信ができるということです。今後、ＡＭＣの展開というものを踏まえて、具体的に検討をしていかなければならないでしょうが、かなりこれは利用できるコンテンツは多いだろうというようなことが予想されるということをつけ添えて終わらせていただきます。

【司会（井上）】　どうもありがとうございました。

松本さんのご発表で何か。

【平藤】　この作業なんですけれども、先ほど、経歴のよくわからない俳諧の人とかそういうものを確かめるのに時間がかかるということでしたが、優先順位をつけてやっているのではないんですか。

【松本】　つけません。いわゆる、「悉皆」というのが一応目的なものですから、数がか

なり多く、３万というカードがあるので、それは一応当たりをつけておりますが、その中で絞ってしまうと意味がないと考えています。

【平藤】　作業の順番として、あ行からやっていくとかそういうことなのでしょうか。

【松本】　そうです。予めこれが重要な人物というような選別はしておりません。一応あ行のほうで3,000人ちょっとぐらいかな。あんまり選択しちゃうと、現代の国学者評価というものも一回リセットして、考える材料を作ろうという意図もありますので恣意的な選択はしないということを方針にしています。

【平藤】　優先順位をつけて、まずもっとも重要な人たちを先にアップロードしてしまって、次に重要度の低い人たちをアップロードしてという、そういう段階を考えているのではないわけですね。

【松本】　そうですね、悉皆でやっています。

【平藤】　どのくらい期間がかかりそうなんですか。

【松本】　ええ、最初はかなり試行錯誤がありましたので、例えばこのペースでいくと30年かかるんですけれども（笑）、実際はそうならないと思います。あとはそれなりのリソース、人間も含めて集中すればかなり効率化されるでしょう。中・長期的な展望で５年ぐらいとか、３年、５年ぐらいである程度できるかと思います。最初は、やはりかなり試行錯誤でしたので、進行が遅いと見えてしまったのですが。

【平藤】　ありがとうございます。

【司会（井上）】　ほかに質問ありますか。

【黒崎】　せっかくですから、ちょっと私も内部にいながらあんまり詳しくなかったのでお聞きしたいんですけれども、「和学者カード」というものが作成された段階で、「国学者」というか、あるいは「和学者」というものがこういう存在だということがある程度確定した上でこういう作業を始められているんだと思うんですけれども、その定義というのは。

【松本】　これは、基本的に『和学者総覧』の基準で、ちゃんと一応基準をつけておりまして、いわゆる近世から明治の前までに生まれた人で、慶長年間後半以降の物故者から近世、明治元年の前に生まれたという期間があります。それから、和学の概念、これは「和学」と言っていますけれども、我々はこれを国学と言いかえておりますけれども、「和学の概念はできるだけ緩やかなものとし、神学・歌学・歴史・有職等の学問に携わったものは広く採用した。かつ伝記的事項の不明なものでも、また漢学者・俳諧師・狂歌師等でも、和学のうえで顕著な業績の存するものは、原則として採用することとした」（『和学者総覧』凡例）という、すごいこう、かなり間口が広いんです。あんまり基準を厳しくしてしまうと、いろいろなところでひっかからないだろう、逆に間口を広くすることによって利用の便になるだろうということでなるべく多く採りたいというわけで、非常に緩やかです。ですから、後世の眼で見れば漢学者とか、いわゆる蘭学者というような人でも、日本の古典とかについて業績がある人は載ります。一応、そういう『和学者総覧』の基準にのっとってやっているというところです。

質疑応答

【司会（井上）】　では、細かなことも含めて全体的な議論に入りたいと思います。

３人の発表が終わりましたところですが、聞かれた方がすぐに思うところは、これが将来どうなるかということだと思います。当然、我々としては、すべてを一元的に管理・実現できればと思っています。それがいわゆるデジタルミュージアムというものの構想です。

今の段階では、みんな我々のＥＯＳも、それから学術フロンティアの成果も、国学者データベース、神社データベース、それぞれの研究チームが独自につくっております。それぞれでつくっておりますから、ほかのことはあんまり考えないでとにかくつくってみようという状態です。でも、これからは、それを突き合わせることによっていろんな問題が出てくると予想しています。ですので、今日の会議では今どうということよりも、むしろこれがそういうふうになったときに、研究者にとってどういうふうになっていたのがいいかとか、現状、この点はどうなのかという、そういうことをいろいろお聞きいただきたいと思います。当然、内部でもいろいろ調整いたしますけれども、そういった意見を参考にしてということを考えております。ですので、そういう視点からもいろいろな意見をいただいて、それぞれで受けると同時に全体でもそれを今後こういうふうにするというふうにしていきたいと思います。

【ヘイヴンズ】　神社データベースと、松本さんの国学者データベース、両方ともに絡んでいるんですけれども、ゆくゆくはローマ字で仮名をつけると初めは言っていたんですよね。神社データベースのときに気がついたんですけれども、難しい名前には仮名がないんです。仮名をつければ非常に便利になると思うんですよね。それから、国学者データベースもそうなんですけれども、ローマ字が難しいなら、とにかく読み方を仮名で補足してみてはどうでしょうか。

【加瀬】　ご指摘いただいたとおり、将来的にはそういう国際化、あるいはもうちょっと一般に公開するという意味では、そういったこともゆくゆくは検討をしなければならない部分かと思います。現状として、どうしても神社史という１つの分野に固まった状態で現状では公開されているというところがあります。その中での議論という、やや狭いところになっていますので、なかなかちょっとそこまで手が回らない状態ですけれども、展開する段階においては、そういったものというものを検討する必要は出てくるかと思います。

【松本】　確かに、今はローマナイズどころの話ではなくて、その内容をいかに入れるかできゅうきゅうとしている状態です。けれども、例えば、読み仮名はもう全部振ってありますので、仮名のローマナイズはすぐにでも可能です。例えば国学者の名前なんかは仮名でいけますので、そのレベルのローマナイズはあっと言う間にやればできます。しかし、著述、例えば研究論文ですね。本居宣長に関する研究論文というのは、日本語の論文しか集めてないわけでありまして、それは先ほどの議論でも少し話題になりましたけれども、英語の研究論文とか、そういうのは協力してできると思います。そういうのを加えていく

と外国人の人たちにもわかるだろうと思います。

【司会（井上）】　学術メディアセンターにおけるデジタル化の作業は、現在のところ私が責任を持たされていますので、今、ヘイヴンズさんがおっしゃったようなことは、私はもっと強く要求するつもりでおります。仮名、振り仮名というよりまずローマナイズを最初にやろうと。国学者データベースだったら多分名前だけでいいと思うんですよ。神社データベースの場合には、神社名というのは当然ローマナイズになりますけれども、それ以外に何だろうかという、それを決める、早い時点で決めることが大事だと思うんですね。これは、フロンティアなどもそうです。何をローマナイズするかということですね。つまり、ローマナイズするということは、検索でひっかかる確率が高くなる。もちろん日本語が読めなければそれ以上進めないんですけれども、読める人でそれにひっかかったときに「あ、こんなものがあったのか」と気づく。これが大事なんですね。だとすると、細かな文章の一部にローマナイズされていてもそれあんまり重要性はない。これを説明しているんだ、神社なんだ、人名なんだ、あるいは場所なんだ、あるいは遺跡の名前なんだと、こういうことだったら必ずローマナイズしておいて検索にヒットするチャンスをふやすということだと思っています。私は、それはぜひそれぞれのプロジェクトで候補を考えておいていただきたいと思います。

どうぞ、今度は、議論はもう自由ですので、いろいろな問題提起をなさってください。

【遠藤】　国学院大学の遠藤です。

加藤さんのほうであったお話でちょっと聞きたいことがあります。システムをつくり直したことで一般の人が使いにくくなったという点についてです。ごくごく簡単にご説明いただくことはできますか。どういう変更を加えたらわかりにくくなったか。検索でひっかからなくなったというお話は有益だと思いまして。

【加藤】　簡単に申しますと、グーグルとかヤフーの検索でひっかからなくなったというのは、コアなシステムに全部データを突っ込んでしまったんですね。だから、そのデータベースの存在を知っている人はそこに入ってこられるんですけれども、単純に例えば縄文土器が知りたいと思ったときに「縄文土器」と入れたら、本学のシステムがひっかからなくなってしまったということなんです。だから、「「縄文土器」と入れたときにひっかかるようなふうになっていたので私は見つけられた」という方からのご意見や、「小学生が授業でパソコンを使いますので、それで「貝塚」と調べて国学院大学の資料をみつけました。その資料を夏休みの教材として使わせてください」という問い合わせがあった。別のシンポジウムでもご指摘を受けたことなのですが、小学生でも使えるようなもの＝一般人でも使えるようなものを目指さなければいけないと。かつ、研究者が使えるものというと欲張りな考えかもしれませんが、それを今後どうやっていくのかというのが１つ大きな問題だと思います。今は研究チームごとにやっていますので、先生が書かれた記載を重視してテキストファイルをつけているんですね。なので、検索用の語彙が並んでないのです。例えば、「縄文土器」と書いてあればいいんですが、「勝坂式土器」と書いてあった場合に、これが縄文土器かどうかわかるのは考古学をやっている人だけなんですね。だから、大きな

タイトルをつけてやる、そういう作業を今進めようとしているところです。

【稲場】　神戸大学の稲場です。

今のことでの関連なんですけれども、将来的にデジタルミュージアムで共通プラットフォームなり検索システムなりをつくるときに、今の問題は非常に重要だと思うんですね。もともとデータベースを知っている人は、そこの最初のページからキーワードを入れて検索する。でも、多くの人が、そうではないグーグルとかそういったところで検索すると、やはり巡回ロボットがすべてのテキストにアクセスできて読み込めるようなシステムになっていないと今おっしゃったような問題が必ず起きてくるので、それはどうしても避けては通れないというか、その点は非常に重要かなという。

逆に言えば、今後、どんどんどんどんブロードバンド、検索システム、そういったものが技術的に向上していくと、そもそも共通プラットフォームなり最初のポータルサイトが必要かどうかということも将来的に議論が出てくるぐらいに、もうすべてグーグルなりヤフーの検索から必要なデータはデータベースに入れるという時代が来るような気はするんですよね。そういうふうに多分グーグルとかもつくると思うので。そうすると、各項目の記述の最後に、データベースのもととなる記述のクレジットを必ず入れるというような準備を、各データベースの各項目の最後に入れていかなきゃいけない。もちろん検索した結果、その項目の一番上の部分を見るとこのデータベースだというのはわかる。でも、多分そこまで細かく見る人が、研究者は見るでしょうけれども、一般の人たち、あるいは研究者の一歩手前の人たちが細かく見るかどうかわからない、という問題があるのかなと思いました。

【司会（井上）】　この点については、ＥＯＳのほうがかなり考慮していますね。フレーム構成になっていますから、どの項目を見るときも、左側のほうにクレジットが参照できるようになっています。それから、ＥＯＳの場合には、最初のトップサイトから入る人よりも検索でひっかかってそこに行く人のほうが多いということはわかっています。ですから、すべての言葉が検索にひっかかるようになっているので、ほかもそれに準ずるようなものにすればいいというふうに考えています。

あと、これは、詳しくは私もシステム上よくわからないんですけれども、大体３つぐらいの流れというのを想定しています。１つはグーグルやヤフー経由でアクセスしてくる人、こう人たちの大半は国学院が何をやっているかについてはあまり興味がない可能性がある。先ほど、辞典だったらある項目についてわかりさえすればいい、これがいると思うんですね。それから、国学院の全体のデータベースを知って、比較的頻繁に利用する人がいると思います。そのような層には、国学院にはＥＯＳもあると、こういう画像もあると、データベースもあると、それを国学院大学のトップページですべてが検索できるようなシステムがあったら便利でしょうね。これについては情報システム課の人と相談して、それは可能だと、音声でも画像でもそれはひっかかるようにできるというので、それをお願いする予定です。もう１つは、例えばＥＯＳならＥＯＳを徹底的に使いたいという人で、それは、今度はＥＯＳのメニューの中での工夫ということになりますね。あるいは、神社データベ

ースは神社データベースの中の工夫ということがあります。それは、1回きりではなくて、それを自分の研究に役立てるためにとことん利用しようとするそういう人たち。それに対するケアというのは、個々のサイトに考えてもらう。つまり、どういうものが使いやすいのか、どういう人が来るだろうか、どういう付加的なものをやるか、そこでは特殊な検索とかいろいろな利用方法が出てきても構わない。それくらい、私の頭ではそういう3層を想定しておりまして、1番目は、一番簡単というかひっかかるようにすればいいんですから、そもそもその変なシステムをどうして入れたのって、加藤さんに言ってもしようがないんですけれどもね。たまたまその時期、そういうソフトでしかなかったということがあるので、それは簡単な問題だと思います。

2番目、3番目が、まさにいろいろなご意見を聞いて改善する余地が非常にあるところだというふうに思っていますけれども。

【稲場】　もう1件いいですか。今の検索の2層目、3層目の点なんですけれども、国学院全体のデジタル・ミュージアムでの検索ですべて検索できる、それから、個々のデータベースで検索できる、2つつくるということですけれども、私は、どっちかというと、それも全部一元化したほうがいいのではないかと思います。例えば、シェアウェアのソフトでDDwin（http://homepage2.nifty.com/ddwin/）というソフトがありますね。これは百科事典とか英語の辞典、複数登録して、自分でこれとこれを今回は検索の対象にしたいとか、あるいは、出てきたものをクリックしてここだけを集中的に見たいというふうにできる。一番便利な点は、1個1個データベースを選ばないで、最初、DDwin の検索システムからすべてが入れる。それのほうが効率の面からもいいのかなと。そうすると、先ほどの2層目、3層目を分けるのではなく、自分で今回はこのデータベースとこのデータベース、両方くし刺し検索をしたいなというときはそれをクリックして、キーワードを入れて両方検索が出てくる、そういう選択ができるようなもの、技術的にそんなに難しくないんだと私は思うんですけれども、そういう方向のほうが便利なのかなというのがちょっと私の感想です。

【司会（井上）】　そうですね。これはつくってみないとわからないんです。情報システム課の人は大丈夫だとおっしゃているんですね、全学のデータベースに対して一度に検索が可能であると。そして、ちょっと欲張って、私はそういう、検索したことと、学内の研究プロジェクトとか、先生の研究成果とか、それもすべてリンクさせて、国学院大学は一体どういうコンテンツを今持っているのか、過去貯えたのかというのがすべて一元的に検索できるようにということを頭の中では考えているのですね。そのことと、個々のデータベースが持つ特徴を十分に生かすということが全く齟齬なく実現されるならば最初のだけでいいのです。ただ、テキストが中心になるものとか、画像が中心になるものとか、あるいは、もっと動画とかいろんなものが出てきますね。そのときに一元化しておくほうがいいのか、それぞれごとにある程度独自の構成にしたほうがいいのか、そこら辺になるとちょっと私はまだわからないので、その時々の技術と国学院のスタッフで、あるいはいろいろな人の意見で決めていこうというふうには思っています。非常にいいアドバイスでした。

【加瀬】　こちらの神社データベースのほうでも、あとフロンティアのほうでも、画像というものを、重視していくという方針になっています。内部でもちょっとありましたけれども、例えば、特に画像なんかの場合ですと、何らかの共通した指標、例えばこういったものを附帯情報として盛り込むとか、そういったことが必要だと思っています。実際そういう話になりつつありましたけれども、今のその現状での先生のお考えというのをちょっとお聞かせだきたいと思います。

【司会（井上）】　これは、画像、動画、それからデータベースなどみんなそうなんですけれども、大きな枠組みを作る一方、細かいところはある程度、現場の裁量権を残しておくことが重要だと思います。大きなルールとしては、ここのところは皆さん入れてくださいというものを決めて、それ以外にそれぞれのデータベースで独自につけ加えるものは、それぞれでやろうかなというふうに思っているんです。ベーシックなものをどんなものにしたらいいかということはそれぞれで意見を出し合い、また、今、ほかのデータベースが大体どういうインデックスを持っているかということですよね。そして、どういうふうにつけたらいいのかな。さきほどローマナイズという話があったんですけれども、例えば、漢字とローマナイズだけがいいのか、やっぱり平仮名も入れておいたほうがいいのかとかいろいろな問題がありますね。そういうことはもう少し来年度詰めなくてはいけないと思っているんですが、大まかな方針はそういうことなんですけれども、よろしいですか、それで。

【加瀬】　わかりました。

【司会（井上）】　これがいろいろ利用を、もっと自由に利用できるようになったことを頭の中で想定していただいて、ほかの機関との、例えば独自につくっているコンテンツとの関係とか、あるいは利用者としての立場から、もっとこういうようなことをやると自分たちも関係していけるとか、そういうことでも。

【ブリーン】　それでは、松本さんの国学者データベースのことについてちょっとお尋ねします。お話を聞いてよくわからなかったことは、約３万人と言っている国学者のデータについてです。例えばその生没年、学統など、そのすべての情報がもう『和学者総覧』に載っているものを、そのまま載せるわけですか。それとも、さらに調査をしてということなんでしょうか。

【松本】　『和学者総覧』も非常にシンプルな、ごらんになったことはあるかと思いますが、名前と、どこに生まれて、それでいつ死んで、多少それでその人物を調べるための出典が、これもわずか１点か２点ということで、基本的に１万何千人をこの１冊ということでしたから、限定的な内容ということであります。当然、それをベースにして、かつ、それより上を目指しておりますので、出典なんかもかなり補充しようと思っています。あと、国学者なんかは地方史が多くて、地方の何とか町史とかそういう郷土史しか書いてないとかそういうのもありますので、そういうのをかなり足しております。だから手間取っているというのはそっちの作業のほうがかなり比重を占めています。あと、これに載っていることもすべて正しいのか、正しくないのかということもチェックした上でかつ加えて

おりました。ということで、まだ全体の 10 分の１という段階ですけれども、時間はかかっています。最初、これをただ単に電子化すればいいんだ、みたいなことも言われていたんです。それも１つの考え方ではあるでしょうが、やはりコンテンツの質というものを新しくいいものにしたいという思いがありました。しかしそうなると、時間とお金の問題が浮上してきますので、今はそれと折り合いをつけつつ現状進めております。

【ブリーン】　では、『和学者総覧』というものが一応権威として使っているけれども、それをさらに肉をつけるという作業ですよね、今やっていらっしゃるのは。

【松本】　そうですね、はい。検索方法とかもまだまだ未定で、今は中身だけは確実に入れておりますけれども、多分これを実際に使うとなるとそれは結構難しい、チャッと簡単には検索できるようになってはない。ちょっとくせがあるので、どうしたらうまい検索の仕方ができるかということも、あわせて考えております。

逆、例えば外国の場合、その国の学問をしてきた代表的な学者たちのデータベースみたいな、そういうのっていうのは何か実際に存在するでしょうか。外国の研究者の方々に向けてのものといったものは。

【ブリーン】　それはどういうことなんですか、そういったデータベースの……。

【松本】　例えば日本だと国学者、朝鮮だったら朝鮮実学の人たちとかいらっしゃると思いますけれども、そういう特定の学問をした学者たちのデータベースみたいなもの、人物データベースみたいなものは何かございませんでしょうか。

【ヘイヴンズ】　それはあるとしたら、どういうふうになっているのかという質問ですね。

【松本】　はい、それもありますが、まずはそういうのがあるのかなと思いまして。

【テーウェン】　わかりません。日本のものしか知りません。

【松本】　どうですか魯先生、朝鮮実学なんかはありますか。何かあると便利だと思うんですよね。朝鮮実学と比較したいんですよ。

【魯】　国学者のように３万人もいませんし、朝鮮実学だと 100 名ぐらい出たらもう多いのではないかと思うんですけれども、それほど数が多くないので、辞書をつくる必要性はあまり無いのかなと思うんですけどね。儒学者といったらたくさんね、出てくるかもしれませんけれども、実学者だったらかなり限られますから。

【松本】　でも、朝鮮儒学者のそういうのは何かやっていらっしゃったりとか。

【魯】　それは、いや、私は勉強不足でまだ聞いてないんですけれども。いや、出てないと思いますね。

【松本】　そこら辺もちょっと、もし。

【魯】　概念がまだあいまいなところがありますので。

【ブリーン】　さっきの続きなんですが、そういったデータベースの使い道なんですよね。僕としては、例えば、その生没年というのも重要なんですけれども、著述などのところはもっと重要なところだと思うので、新しい史料がどんどん発掘されたりするので、そういったところをやっぱり期待したいなと考えています。

【松本】　現状は『国書総目録』があると思いますが、『国書総目録』に載っている範疇で、それもちょっと全部載せるのは時間的に無理がありますので、多少そのうちの一部という形にはなっておりますが、将来的には開かれたシステムにしたいということなので、つくったら終わりということではなくて、常に更新し続けるということですので、そういうご意見、あと調査を進めて増やしていくということになるかと思います。

【真田】　埼玉学園大学の真田です。

どなたでもよろしいんですけれども、将来的には『神道事典』とあわせる形で、何かデジタルミュージアムとか、何か横断検索するとか、何か統合するプランがおありになると考えていいのでしょうか。

【司会（井上）】　それは先ほど申し上げたように、統合の方向を考えています。

【真田】　ですよね。その場合、そのシステム化するノウハウですとか、あるいは、ユーザーのインターフェースの部分とか、そういうものを『神道事典』でのノウハウを生かして、コンテンツさえできればそこへ流し込むというような、何かそういうようなプランというのはおありになるのですか。

【司会（井上）】　それは技術的な問題になるので、今、大学には情報システム課という大学のＬＡＮを管理しているような職員がいます。そういう人たちにもデジタルミュージアムのプロジェクトに加わっていただいて、その上で構築していくということになります。一応、私のプランはその人たちには伝えてあって、おおよそ大丈夫だという感触を得ています。

【真田】　それぞれのパートでつくりやすいようにどんどんどんどんつくって、そちら側が発展していってしまうと、あわせるときにやっぱりまたつくり直すということも出てくるので。

【司会（井上）】　そうですね、ですから、それをグランドデザインというのを来年度からは当然議論しなくてはいけないんです。ただ、コンテンツが全部固まった時点で、この項目はなかったじゃないかとか、そういう事態が起こると、訂正が大変なので、早い時期にそれはやらなければいけないということになります。私は、ほんとうは今年度やろうと思っていたんですが、諸般の事情でずれました。しかし、来年度はもう新しく機構も発足しますので、それが可能になります。そうしないといけないなと思っています。

【加瀬】　技術供与という問題で、実は、その経緯としては、神社のデータベースというのは、『神道事典』をつくっているスタッフにその基礎的なシステムの部分というのはつくってもらっております。ちょっとやった経緯が、どうしてもちょっと成果を上げたいということ、功名心といいますか、そういった強迫観念に駆られていて、システムだけでもちょっとお願いしたいという経緯があるんです。ですので、要するにその前提があって、同じＣＯＥですけれども、そのＣＯＥの中では共通したシステムをつくろうという、井上先生が特に強調されていたんですけれども、その枠の中で一応考えているということで、先ほど武井さんが指摘された部分にも重なってくるんですけれども、最終的には何かいい形での統合というのを模索していくという方向性は一応持っております。

【加藤】　すみません、実は持ってないというか、フロンティアの場合は、ＣＯＥに先駆けてもう公開をしておりましたので、フロンティアオンリーの独自の方法で進めてしまっているところがあるんです。それでデジタルミュージアムが立ち上がるということですけれども、どの程度独自性を残して、どの程度ほかのプロジェクトに合わせていくのかというところが、今、私たちとしては問題というか。先ほど申し上げたように、検索の方法を少し変えたりとかしているところですので、もし、今、先生のほうでお考えがあれば教えていただきたいと思うんですけれども。

【司会（井上）】　一番困っているのが、実はそこです。フロンティアのほうはそれ自体では完結している。だけれども、使いづらいですよね、正直申し上げて、検索の仕方とか。知っている人は調べられるけれども、知らない人はどうしたらいいかというのがあって、それをだれでも入れるようにするという。そうすると、それは全く新しいソフトに入れかえたほうがいいのか、そのままで改編できるのかは、今度専門的な人に見てもらって変えるしかないだろうと思っています。現在のフロンティアのものは画像データ中心ですから、そこの部分はもうでき上っているので、要は、それをどう修正していくのか。たとえば、それぞれの配置ですよね、それから、インデックスをどうするかというようなこと。それは本格的に考えてシステムの人と相談するしかないと。ただ、ほかのところはまだまだで、松本さんのところもこれからですからね。それから、神社データベースもある意味で本格的なものはこれからということなので十分改編の余地があると思います。

先ほど、どう検索してヒットするかというときの、そのでき上がったものを大体どんなイメージで描いているのかなと、私、ちょっと疑問に思ったんですけれども、例えばエクセルの表みたいな、こういうものですと、これはそれぞれの言葉にヒットすると同時に、その表を場合によってはユーザーが操作すると。例えば、生没年順に並べかえるとかそういうことをできるようにすると非常に便利なんですね。でも、非常に重たくなってどうかという、３万件もあったらちょっと、3000件だったらそんなでもないと思うんですけれども、３万件あったらどうかなというのがあります。そうではなくて、例えば言葉だけひっかかってね、あとそこに項目というのだったらこれは非常にシンプルですから、どの言葉でひっかかってもその人の名前のところへ行けば、ほかの付加情報はそれで一元的に見られるということですね。

どれがいいかというのもこれは構築する中で考えていただいて、今度逆に使う人は、そういうものってどうなっていると便利なのか。一番シンプルというのは、今申しましたように、例えば、平田篤胤というのがひっかかったと、そうすると、国学者データベースには生没年が書いてあり、名前がこうこうだと、小さいときはこうでという、いわゆる基礎情報が書いてありますよね。それは丸ごとわかればもう満足という人と、それから先ほど言ったように、もし生没年、あるいは、生まれた場所、ところとか、幾つかインデックスをつけると、例えば、平田篤胤の門人はこの中に何人いるかというのが検察できるわけですよね。並べかえができるわけです。検索でもそれはやっていけますけれども、それは非常にやっかいになりますね。でも、表をエクセル的な表にしておけば、例えば門人のとこ

ろで鈴屋（すずのや）と例えば入れると、それを入れるとその人だけがばあっと集まってくるというようなことになりますよね。そこまで考えてつくるかという、こういうことになるんですね。

今言ったようなものを３万件やったら、負荷がかかりますが、コンピュータの能力はどんどんどんどん上がりますから、今は大変だと言っていても、そんなの簡単だよという時代が来るのかもわかりません。そうすると、今はそういうことだとちょっと時間が随分かかるよというのでやっちゃうと、将来もっと早くなったときに、なぜこんなシステムをつくらなかったんだということになりますよね。そういうのがあるので、その辺を、私自身はこの関係者といろいろ議論して、ベストは難しいけれどもベターなシステムにしておきたいなというのがあるんですね。

こんなのは参考にはならないかもしれませんけれども、私が今センター長をやっている宗教情報リサーチセンターというところではいろいろな試みをやっておりまして、数少ないから３万件がどうなるかわかりませんけれども。

はい、これがそのサイトです。これは大したシステムではないんですけれども、例えば、著者による並べかえとか、それから、タイトルによる並びかえでこういうふうにすると、こうなる。次、カテゴリーよるというふうにするとこのカテゴリーごとに出てくるという、そういうしくみです。これはデータは幾つでしたかね、大した量ではないんですけれども。要は、そうするとこういう項目を幾つつくるか。著者、著者名、アルファベット名、あるいは生没年、門人だったらどこの門人とかをつくっていくと、非常に多ければ多いほど便利になるわけですね。単純にその人でヒットするというだけではなくて、この出てきた表を操作することによって、自分の目的に合ってこのリストが使える。それは１つ１つヒットするよりはるかに便利になるんですね。独自の研究というか、思いつきで何かを組み合わせてやれるかもしれないということになるわけです。だから、こういう仕組みも場合によっては考える。特に、例えば大場磐雄も、いろんなところでひっかけでクロスできるようにとかなってくると、何ていうんでしょうね、１つ１つヒットするのに比べて、こういうカテゴリー別にまとめられるということは、とっても便利なんですよね。それを私は考えてはいるんですが。

【稲場】　全く分野が違うんですけれども、社会学の中でワールド・バリューズ・サーベイというのがありますね。そこが今、オンライン上で、自分で検索して結果のレイアウトまで自由にできるようになっていて、例えば90年、95年、イギリス、フランス、日本とか、自分で全部カテゴリーを選択して、その情報だけ欲しいと、それで検索をかけると、例えば95年、2000年で、日本、アメリカ、イギリスとかその一覧表ができて、それをまた自分でアレンジできるようなシステムになっていますね。

確かにコンピュータの負荷で時間はかかるけれども、そんな５分も 10 分も待つものではないので、先ほど、テクノロジーがどんどん進歩すれば、負荷もどんどんそういったものもなくなるという、そういうことを考えると、やはり最初からそういったことを目指して構築していくという方向のほうが、利用する側としては非常にありがたいなというふう

に考えています。

ついでにもう１点いいですか。

【司会（井上）】　はい。

【稲場】　今度、国学者データベースの件なんですけれども、『和学者総覧』が既に活字としてあるわけですね。これは、国学院が権利を全部持っている。

【松本】　著作権者が研究所です。

【稲場】　ということは、一応そのままデータベースとして公開することも可能なわけですね、今の段階では。それは難しいですか。

【司会（井上）】　いや、それはすでに本屋から出版されていますので。

【稲場】　本屋がいる、ああ、そうですね。国学院関係の。

【松本】　著作権は研究所なんですけれども。

【稲場】　それは難しいということですか。

【司会（井上）】　版権とか、そういうのがかかわります。

【稲場】　では、それは置いておいて。今の段階でデータが３万人分の 3000 件ぐらいあると。テキストファイルなりエクセルなり。

【松本】　そうですね、エクセルの中にもう突っ込んであります。

【稲場】　そうすると、ある意味では暫定的に公開することも可能ですね。

【松本】　可能です、はい。

【稲場】　私が思うに、やっぱりマンパワーというのは多ければ多いほどいいと。例えば、各地域、民俗学をやっている人、いろいろ資料を集めている人、図書館の司書、そういった人たちの力をかりるということもできるんですね。例えば、3000 件できたデータベース、一応はまだ暫定的だけれども、間違いなり、あるいは新たな資料が各地域で発見されたかどうか、情報をお寄せくださいという形をとりながら、どんどん公開していくと。そうすると、チェックが働きますね。国学院のスタッフだけでそれを全部やるのは難しいという形のことを考えると、今から公開することもできるのではないか、それに関してはどうでしょうか。

【松本】　議論は、作業班の中ではされてはいます。「本当なら、こうしなきゃいけないね」ということであります。そのためには、いろんな考え方が確かにあって、もうオープンにしてしまって、それでいろいろなところから、稲場さんがおっしゃられたような意見をもらうべきだという意見から、いや、まずはある程度メンバーシップを限定して、とりあえずは専門家ということですね、そういうふうにやっていこうと。ちょっとそこら辺は、まだ詰めてはいません。でも、稲場さんのおっしゃっているような可能性というのも排除はいたしません。まだそこら辺までの議論が、これは詰めなきゃなというのは、先月あたり、いよいよできそうだというところで話は出て、私もその話をちょっと、実際の作業者たちとそういう話は進めております。おっしゃっていることを排除するというか、可能性は僕は十分あると思います。いくつかその前に段階をつくるのかもしれないなという気はしていますけれども。

【遠藤】　その件に関するんですけれども、『和学者総覧』というのが、プロジェクトとして情報を確認をして入れていったものではないですか。その後に情報を寄せてもらったときに、その情報が確かかどうかというのを確認するプロセスがまた入ってくるので、その点でいうと、なかなかそこで難しい問題というのがまた発生してくるところがあって、すぐに公開という、情報を寄せていただくのは非常に参考になるんですけれども、それを確認していくのが、特に生没年とかこういう基礎情報というのはちょっと難しいところがありますね、作業をしていると。

【松本】　要は、そうなんですよね、オープンにしてしまうとそれへの対応が。

【司会（井上）】　ただね、それはあんまり……、言い訳のような気がするんですけれどもね。要は、もらっておけばいいわけですね、情報を。指摘してもらえばいいわけですから、それに基づいて訂正するのに時間がかかろうと、タイムラグがあろうと構わない。

【遠藤】　訂正する時間というよりは、論拠……、論拠というか、その情報が確かかどうかというのが示されない情報が寄せられた場合に確認するのに時間がかかるというか、そこの部分がちょっと難しいなというのが。

【司会（井上）】　だから、それは将来的に、例えば、一応完成してからそれをやったとしても同じで、それは『神道事典』で既に問題になったことではないですか。一応出すけれども、こういうものは絶えず変わるんですよ、小さなマイナーチェンジはずっとあるんです。だれかが指摘して、誤植のレベルから、新しい、ほんとうに史料についてはね。私は、そういう新しい発見だったら、場合によってはクレジットをつけて、こういう人が寄せてくれた、こういうことによって、今までのある意味で学説が変わりましたぐらいのことですよね。そのことと、例えば、ほんとうの誤植ですね、これはいっぱいあるんです、文化２年と３年を間違えたぐらいのことはいっぱいあるかもしれない。それは指摘をもらったときに、やっぱり間違っていたと、それはすぐ直しましょうということでできるレベルのことでしょう。そういう作業をずうっと閉じたままでいると大変だという指摘だと思うんですよね。だから、早い時点で開いてしまって、これが書籍とオンラインの場合の決定的な違いであって、きのうも言いましたけれども、ベータバージョン程度で公開しちゃって「今はまだ試用期間」ですとちゃんと表示する。皆さんの意見を参考にしながら、ある時期で正式バージョンにしますということであれば、私はなるたけ早いほうがいいという考えです。そのほうが、みんなが研究しているという気にもなると思うんですけれども、いかがでしょうか。

【平藤】　生没年をお墓で確認したりしているんですよね。

【松本】　それもやっていますよ。

【平藤】　そういう場合、地元の人がお墓の写真を撮って送っていただくということもできます。

【松本】　それはありがたいと思いますね。

【平藤】　稲場さんがおっしゃりたいことは、そういうものを受け付けられる仕組みがあればいいということですよね。

【松本】　僕も申し上げていたとおりですが、ただこれは公開するのではなくて、やはりそういった全国の国学者研究のネットワークをつくるということも、やはり目的にはしたいということです。おっしゃられていることの意義はよく分かります。何しろちょっとまだこの、うちの内部体制の問題がございまして、そこを十分に、それに対応できるような内部体制が、まだまだ構築はされてはいないというところで、それをばっと出せるかというと、出しづらいという問題があります。

【藤井】　ちょっとずれるかもしれませんけれども、途中で公開するというよりは、松本さんもさっきおっしゃられたように、市町村史の関係で結構史料が発掘されたりということはあると思うんですけれども、公開というよりは、とにかくそういうところとのパイプというか、ネットワークづくりが大事なような気がします。こういう文書が新たに発見されましたというようなことですよね。そういう情報が国学院にすぐにぱっと届くようなシステムですよね。そういうものができていれば、公開かどうかというよりはそのほうが重要な気はしますが、いかがでしょうか。

【松本】　確かにそれも事実でして、多分公開をというのと両輪で行けるのではないかとは思っております。そういう地方、特に国学者、この３万点というのは、やはり地方の人の協力なしにはおそらくはできないとは思いますので、出すことによって、逆に情報がこっちに吸い上ってくるということですよね。そういうこともしなければならないというふうには思って、課題ではありますけれども、そのご指摘のとおりであると思います。

【司会（井上）】　大分時間も少なくなったんですけれども、あと、そうですね、加瀬さんが言われた神社データベースの、私自身は非常に壮大なプログラムを持っておりまして、これは実現するかどうかはわからないんですけれども、全国の、どれぐらいになるか、数千社ぐらいの神社の総合的なデータベース、地理的、歴史的、付加的な状況を全部寄せ集めたような壮大なデータベースを、それこそ10年、20年計画でつくりたいと。例えば、鶴岡八幡宮でも他の神社でもいいですけれども、その神社に関する地理的情報、歴史的な状況、それから、そこにかかわる文書の情報、それにかかわる研究の情報、そうしたものがデータベース上で一元的に集まると、これは研究者もみんないろいろな広がりが出るのではないかと。それは、宗教地理学とか、宗教民俗学とか、歴史学とか、いろいろなところに広がりを持つデータベースになるだろうなという予感はあるのです。その一方、作業としては、これはものすごいお金とマンパワーが要るというのがありまして、どうなるかまだわかりません。ただ、大型の予算がついたから何か少しそういうことをやる意義はあるなと思っています。

加瀬さんがつくられたようなデータベースというのは、これはいわばその足場になりましてね、これをどう展開したらいいかということを、そうなったら本格的に議論をしたいというふうに思っております。

もし特になければ、20分間休憩をいたしまして、今度はおふたり、外部からのご意見もいただいて、さらに具体的な指針を得たいなというふうに思っております。